「女は黙って飯を炊け」

田村 ぽち(犬)

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「女は黙って飯を炊け」

【Ｎコード】

Ｎ６４６１Ｉ

【作者名】

田村　ぽち（犬）

【あらすじ】

正しいジェンダーフリーとは何なのか。性別の観念に偏りのある筆者が十六歳の時に書いた、こじつけ社会派エッセイと、それにまつわる個人的で身勝手な本音の数々。

社会的主張（前書き）

本文は、前作に比べると若干かたい文章になっていますが、第二章では筆者の性別観に対する偏った本音を好き勝手書いています。後書きのつもりでしたが少し長くなったので章にしました。

余談ですが、前作「道端セックス禁止令」にも後書きを追記しました。是非ご覧になって下さい。

社会的主張

近年、女性の社会進出に伴って、日本でも様々な場所で叫ばれているジェンダーフリー。「男は外で働き、女は家庭を守る」というのは最早過去の考え方で、様々な権利に守られ、今日も女性達の世界はどんどんと広がっていっている。だが、今の日本国民の性別に対する認識は、「本当の意味での男女差別のない社会」に向かってその歩みを進めているのだろうか。

一番の疑問は、本来差別化を無くすということを望んでいるはずの女性が、その権利を過度に主張し過ぎているのではないだろうか、ということである。人間として女性が男性より劣っているということはないだろうし、当然の権利を主張することは間違っていない。女性の政治や学問、様々な分野に置ける社会進出は、人類にとって大きなプラスだ。しかし、それを当たり前の様に感じ過ごしている現代の女性達の更なる主張は本当に必要なことなのか、甚だ疑問である。

女性専用車両導入の話を耳にした時には、なんとも腑に落ちない気持ちになった。導入当日のニュースでは、駅での男性陣に対するインタビューを放送していた。その中には、「痴漢に間違えられる事を気にして、気を使わずに済むようになって良かった。」　と、導入を歓迎する意見述べている人もいた。しかし、元はと言えば、その様にビクビクしながら満員電車に乗らなくてはならなくなったのは、女性達が過度に騒ぎ立ててきたからではないのか。　満員電車の中が男性ばかりならば、痴漢の発生率は低いだろう。発生しても、女性ほど騒ぎ立てることはないのではないか。そこへ、男性と同じ権利を主張し、同じ様に仕事をしたい、勉強をしたい、と言って入っていくのなら、それなりの覚悟が必要である。痴漢に遭いや

すそうな露出は控える、その様な格好がしたいのであれば少しくらい男性と触れ合っただけで一々騒がない、故意に触られたと感じたら止めるよう警告する、等、女性自身が毅然とした態度で対応すれば、これだけで、まず一時の感情に任せた行為は減少するはずである。

いつだったか駅のホームで、登校中の満員電車で痴漢に遭ったという話をしているのが聞こえた。声のする方を見ると、スカートの丈をやたら短くした、制服姿の女の子数人が話しているのが目に入った。その服装では痴漢に遭うのも頷ける。自分の身は自分で守れと言うことだ。

友人にこの話をしたところ、「女は痴漢を気にして、好きな服も着ることができないのか！」と言われた。しかし、それならば、男は痴漢を気にして、電車の中で鞄を手に下げることもできないのか、何もしていなくとも特定の車両から追い出されなくてはならないのか、と言いたい。

以前、別の友人達と外出の為電車に乗っていた時、丁度運悪く切り替えの時間が来て、乗っていた車両が女性専用に変わってしまった。途中で気がついて車両を代わったが、気まずい思いをしたことがある。

車内で迷惑な存在なのは痴漢だけではない。鼻をつまみたくなる程香水の匂いをさせた人、ペットを専用のケージではなく鞄に入れて半分体がでているような状態で連れ込む人、音楽を大音量で聴く人、酔っ払い、躾のなっていない子供、痴漢も含め、個々のモラルの問題である。痴漢をするのはほんの一部の人間だ。男性全員が痴漢をするわけではないのに、なぜ女性だけを優遇する必要があるのか。女性専用の車両が作られ、男性はその他の車両にすし詰めにされ、時間外に女性と同乗する際にも必要以上に気を使わなければならない。明らかに、男性が冷遇されている。これこそ男女差別ではないのか。

雇用の面でも、女性の権利については大きく取り上げられる。男女雇用機会均等法により幾分か改善されては来たが、雇用の際、女性は男性に比べていくらか不利だと言うことは事実である。例えば同じ学歴、同じ能力の男女がいたとしたら、雇用者は男性の方を選ぶだろう。女性は、結婚を機に退社、或いは、退社はしなくとも、出産や育児の際に長期の休暇をとる可能性が高く、その際、穴を埋めるために新たに人を雇わなければいけなくなり、教育をする手間が必要になるからだ。これを女性差別だと主張する人がいるが、仕方がないことではないだろうか。　育児は男性が代わってできる事でもある。現に欧米では男性も育児休暇をとることができ、日本でもその制度を取り入れている会社が増えてきている。しかし、出産はどうだろうか。出産というのは女性だけに与えられた能力であり、男性が代わって行うことはできない。出産は絶対にしない（種族保存の為にもこの考え方はどうかと思うが話が長くなるので割愛する。）と決めていれば話は別だが、そうでなければ何ヶ月かの休みは避けられない。雇用する側としては当たり前の決断だ。

執拗にジェンダーフリーを叫ぶ人達が一番勘違いをしているのではないかと思う点は、男性と女性という、根本的な性別の違いについてだ。男性と女性は、骨格や筋力、生殖器官といった体の造りが違うのは勿論のこと、脳の造りも違う。男性には狩猟本能があり、女性には母性があり、その他にも、個々の性格という以前に、男女の考え方には違いがある。これは科学的にも証明されていることだ。ここで重要なのは、これは科学的根拠に基づいた「男女の区別」であって、精神的な「差別」とは違う、ということである。今の社会では、この「区別」と「差別」をごっちゃにして考えている人が非常に多い。男と女の間に生物学上の差異があるのは事実であって、それに伴って自ずと違いが出るのはある程度仕方のない事なのだ。これはどちらが良い悪いという問題ではない。

確かに女性解放運動以前は女性が冷遇されていた。当時の女性が

社会的に正当な権利を得て、今日の女性の様に自由に行動ができるようになるまでには多くの人達の相当な努力が必要だったに違いない。昔の男性は何故あんなにも女性を不当に扱っていたのかと腹立たしくも思うし、女性の社会進出は喜ばしい事だと思う。しかし、だからといって、過去の仕打ちへの仕返しをするかの様に急に大きな顔をするのはどうなのか。

この、「女性優位社会」において、最も勘違い度が高く、そして恐らくその偏った理論を広めやすいであろうコミュニティーは、主婦だ。

現代の専業主婦の仕事は、文明の発達によって、昔に比べるとだいぶ楽になっているはずである。洗濯は洗濯機がやってくれるし、ご飯はボタンを押せば勝手に炊けるし、風呂を入れる時はお湯の蛇口を捻ればいいし、掃除も掃除機を動かせば良い。そうしてできた余った時間に見ていたテレビで女性差別の話を聞いてしまったから大変だ。急に、仕事から帰ってきた旦那に向かって、やれ自分は頑張って家事をしているのにお礼の一つもないだとか、もっと家族サービスをしろだとか言い始める。決して主婦業が簡単な事だと言うつもりはない。一家の家計を預かり、一部を機械に頼っていると言っても毎日掃除洗濯をこなし、栄養管理に気を使いながら献立に頭を悩ませ、子を持つ家庭ならば子供にも気を配らなければならないというのは大変なことだろう。自分の努力を認めて労って欲しいと思うのは自然なことだ。だが、これは主婦に限ったことだろうか？家庭を持つ夫は、良い成績を納め、家族の為に給料を稼がなくては、というプレッシャーの中で必死に働いているはずである。これに対して、果たして自分の努力を主張する世の主婦達は、「家族の為にいつもご苦労様」と日常的にお礼を言っているのだろうか。そう考えれば、外で働いていようが家で働いていようが、男だろうが女だろうが関係ない。家族サービスにしたってそうだ。男性がするものだという概念がそもそもおかしい。共通の時間を持ちたいというの

なら女性がセッティングしてもいいわけだし、男性のしたいことに女性が付き合うのも家族サービスだ。平等とはギブ・アンド・テイクのはずなのに、今の女性達はギブを怠りテイクばかりを求めている気がしてならない。まず、自分を見直し、相手を思って行動すれば、相手も思ってくれるはずだ。

主婦が女性優位論を身につけると厄介なのは、その考えが子供に伝達されやすいからだ。毎日一緒にいる母親が、父親に対する愚痴ばかり言っていたらどうだろう。外で働いているところを知らずに、家でくつろいでいる姿しか見ていない子供は、父親を大したことはないんだという目で見るだろう。そんな父親に説教をされても、あまり心に響かない。父親が子育てに協力しないという話を聞くが、現代の父親を子育てから遠ざけているのは他でもない母親自身ではないのか。父親との接点が薄くなった子供は、ますます母親の考えに傾倒するようになる。子供というのは、思った以上に大人の言っていることを聞いているものなのだ。そうして、「女は偉い、男はだらしない」という考え方は子供にも広まっていく。これでは男性の立場が弱くなっていく一方である。

色々と具体例を上げて日本人の間違ったジェンダーフリー論について述べてきたが、要するに、男女共に性別というものを意識し過ぎなのである。性別だけではく様々なことが開かれてきた現代では、違いという事実をしっかりと認識し、その上で、大別された括りに拘らず、個々の特徴を捉えていく事が大切なのだ。

個人的主張（前書き）

最初はもう少し考えて書くつもりだったのですが、途中で面倒になってただ自分の思っていることを羅列しただけになってしまいました。雑談を聞いているようなつもりで読んでください。

個人的主張

文章に流されて結びをなんとも穏便に済ませてしまったが、十六歳の時これを書いたのは、「現代の女は少し態度がデカすぎる。そしてそれは女の価値を貶めている。」と思ったからだ。

個人的には「女は女らしく」という考えは間違っていないと思う。本文にも書いたが、男と女というのは肉体的にも精神的にも違うものだからだ。どんなに男らしい女がいたとしても、結局は女なのだ。そして男には男の考え方やテリトリーがある。それを、大して考えもせずにずかずかと入っていく。本来それを察して気遣えるのが、女としての役割なのではないかと思う。科学的に見ても、女の方が精神的に成熟しているらしい。つまり、男と同等になろうとしているという事は、社会的地位の向上に伴って精神な面を下方修正していることになる、と思う。これについては何か根拠があるわけではないが、性別の境を乗り越えようとしている女より、自分の立場をわきまえ、その上で最大限努力しようとしている女の方が精神的に安定しているように思うからだ。

ここからは単に個人的な好みの話になるが、男らしい女らしいというのは、様々なロマンに繋がることだと思う。また、男女が家庭を作り共に過ごす上で、お互いが良い距離を保って生活していくための上手い例とは考えられないだろうか。

例えば、自分は音楽が好きだ。ロックンロール、パンク、ロカビリー、ブルース、ジャズ、ハードロック、メタル、クラシックと色々聴く。

その中で、こと格好良さ、ストイックさを求めるバンドに関しては、圧倒的に男がやった方がいいと思っている。力強さ、見た目、

世界観、泥臭さ。これぞ男の世界だ。夜な夜なガレージに溜まって酒や煙草を飲みながら激しく音をぶつけ合う。今の日本にはアメリカやイギリスの郊外の様に集まって騒げる広いガレージはなかなかないので、スタジオかライブハウスか誰かの六畳一間と場所は限られるが、それでも男ばかりのバンドマンの集団というのは独特のものがある。

ちなみに、ジャズに関してはこの限りではない。女性特有のしなやかさがジャズの渋い雰囲気を作り出すことは少なくないのだ。

誤解がないように言っておくが、これはあくまでも個人的な好みの問題であって、決して女はバンドをやるな、と言っているわけではない。更に言うと、ジャニス・ジョップリン、シナロケのシーナさん、ロリータ18号のマサヨさん、腐レディー・マーキュリーのニック・ジャガイモさんなど、女性で素晴らしいバンドマンもちゃんといる。見た目は怖いが話してみるとなんとも気さくな彼女達である。（もちろんジャニス・ジョップリンには会ったことがないので”彼女達”の中には含まれない。念のため。）

これも本当に筆者の個人的な意見だが、三歩下がってついてゆく女というのは、いい。現代では三歩だと行き過ぎな気がするので「半歩下がってついてゆく女」。これだ。

男を立てるどころか、プライドをぐしゃぐしゃに踏みつぶすような女が多い。男はそれになれてしまって、今度は少し誉められると、すぐいい気になる。こうして、立てられるような男がますますいなくなり、女はどんどん態度がでかくなっていく。これではどうかと思う。

半歩下がって、といっても、男はただ威張り散らしていればいいというわけではない。黙って俺について来い、と言いたいのならば、基本はきちっと前を向き胸を張って、そしてたまに女のことを気遣わなければならない。前を歩いている男が自分勝手にずんずん歩いていってしまったのでは、女がいくら頑張っても追いつけないし、

下を向いて自信なさげに歩いていたんでは、女の方が追い越してしまう。半歩の距離を保には、お互いの努力が必要なのだ。

家庭では、この関係を子供が見ることになる。父は、母を気遣いながらも自分の意志を強く持ち、家族のために懸命働く。母は、そんな父を尊敬し、陰ながら支える。こんな両親を見ていれば、目上の人を敬い他人を気遣う心が育つだろう。間違っても、お父さんうざいだのキモイだのといった言葉は口からでないはずだ。

最後にもう一度念を押すが、色々な事を書いているがこれらはあくまで個人的な好みの話である。世の中全ての人がこうあるべきだなどと横暴なことは思っていない。筆者自身もここに書いてあることに忠実に沿った生き方をしているわけではない。女らしくない女は嫌いだというわけではないし、男にしても同じだ。現にゲイの友人もいる。そこに関しては誤解しないで頂きたい。

しかし、自分なりに性別に関して色々な考えを持っている事は事実である。また、他の人達がどのように考えているのかということにも興味がある。これを読んで何か感じることがあれば、男性にも女性にもそれ以外の方にも是非意見を述べて頂きたい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6461i/

「女は黙って飯を炊け」

2010年10月9日01時58分発行